

そこで僕は桜井が九州から堀りおこして、モダンな東京の街に持ちこんで来た他界の鉤脈を、僕自身のなかに僕の肉体の地底のなかに堀り込む僕はゼロ次元という名前の集団を作っており、なぜかアメリカやフランスからの直輸入の芸術の古衣を脱ぐように全裸になって街のなかを走りはじめていた。無知な田舎者を急改造するためつめ込めるだけむさぼった新しい思想や芸術論で武装していた鎧兜をコンクリートの地面に叩きつけるように街のなかをはいずりまわりはじめた。それは成形されはじめて身動きがとれなくなりそうになった僕の最新の西洋式「自我衣装」を破壊して、もう一度外皮の裏側の中味としてあった裸身の自分から出なおしてみようとしたからであり、僕が全裸になって東京の街を走れば、かつて僕が身体に急いではおろうとした外国製の死装束が東京という最新の街のなかに姿をあらわしてそこに見えはじめたからでもあった。

いやちがった、僕が全裸で東京見物をはじめたら、逆に東京の街が「ゼロ次元全裸行進」を車をとめて凝視していたのだ。びっくりしたのは僕ではなく東京のほうであり、うつろな目付きでなんとかこんな連中の狂態を無視しようとしながらも、一方的にしつこく予告もなしに街中を強姦する芸術テロリストを奴らは防察する手段がなかった。その頃の直輸入前衛アーティスト達も並列して室内で卵割り交響曲をやっていたが、彼等輸入業者のルートやルールに僕達は一切乗らないことが我々の桜井から学習したルールであったから、僕達の舞台は常にすでに見物客が多勢集会している街角でハブニングは発生しなければならなかったのである。

なぜなら自分が身にまもってしまった自我という外皮を自分自身が覗く技術とは、他者によって自分が外側から内側へと見つめられる立場になることが必要だったからだ。外側の外皮の意識者が常に切り捨ててしまいたかった劣等的な恥部になる彼等自身の裏側の「中味」を全裸にして提示してやれば、裸体を覗く彼等の表情や視座のなかに、「外皮の仮面」が、つまり自分自身の日常的外皮であった「自我」の正体が見つめられるはずであった。東京者に同化しようと進歩発展を願う表側の仮面が、西洋流の前衛をめざしているサル面の表情が、田舎から出てきて切りすてたはずの恥かしきかつての自己実体の裸身を覗いた瞬間に、彼等外皮者の素顔も露出されてしまうのだ。そんな後衛的劣等をひた隠す弱者であればあるほど前衛的幻想の孤独な死仮面に化身せねば生きられなかった、というような内外一体の心的からくりは僕には永久に知覚できないものだが、わが桜井は太つちよで髭むじゃらな浮浪者も驚く風体をしているくせに、そして彼はオチンチンという中味をつけていながら無防備な「母」そのものの布顔をつけて歩いている「化物」でもあった。

僕はこんな桜井の顔を見つめたとき、はじめて逆に「外側から内側の中味」を覗く秘術を伝授されたのだ。彼は西洋や東京ではおめにかかれぬ、それでいて心の基底に焼きつけられている東洋の祖母の顔であり、後日僕がネパールで見たチベット難民の女達の笑顔

そのものだった。そんな桜井の老母仮面のなかには僕の外皮が映るはずもないと思ってながめていると、巨大な布顔面のなかに小さくたびれた女性器のようなポケットがぶらさげられており、そのなかにできるだけ引きのばされてしまった細長の男根が入っていた、というわけである。

僕は常に実母に会えば、いつまでたっても僕は母にとっての息子であった。僕は古風な母から新しく再生しようとする中味思考者としての前衛的息子であった。だから僕は故郷の母から、未開な田舎から、そして日本の地面からの逃亡者であり続けることが、芸術をやること青春を生きること、英語と標準語とを話せる女が抱けることになるはずの、母よりのイニシエーション（乳離れ）でもあったのだから。